



The moment of mjuk!

—あなたが輝く時間を、mjukと呼びます—



見たことのない木の実、小石、
貝殻、知らない国のマツチ：
一つひとつ、物語があつて、
ここにある。

一人娘の私が結婚してほどなく、両親は家を建て替えた。
あたたかく、安心で、木の香りが気持ちのいい家だ。
母には使い勝手の良いキッチンとハーブガーデンを。
そして定年間近の父には、趣味を楽しめるスペースを。
二人とも、自分のペースで毎日の暮らしを楽しんでいる。
「おじいちゃんちに行くよ。」と言うと、
普段は絶対についてこない息子が、黙って支度を始めるから不思議だ。
到着すると、決まって父に言う
「おじいちゃん、机に行ってもいいかな。」
先に息子が行き、しばらくして父もいそいそと腰をあげる。
また始まった：私は母と顔を見合わせてクスリと笑う。
旅に釣り、カメラ、アウトドア：幼い頃、一緒に行くかと誘われたつけ：
けれど申し訳ないことに、私は家で遊ぶのが好きな女の子だった。
お茶を運びがてら、様子をうかがってみると、
50以上も年の離れた2人の男の子が、夢中で何かを作っていた。
「あ：今日の日曜、おじいちゃんと川に行くから。」
結論だけを伝える息子の横で、父は知らん顔をして手を動かしている。
「いいよ。」でも、パパがやきもち焼くかもね――
「おじいちゃん、いいよね。いつもあそこでお茶するんだって。」
帰りの車の中で話しかけると、珍しく弾んだ声が聞こえてきた。
「フイーカって言うんだ。スウェーデンではね。」
そして、しまったというような顔をして、横を向いた。
大人になるちよつと手前――男の子のことはよくわからない。
よし、日曜日には、とびきりおいしいサンドイッチを作つてあげよう。